

後嵯峨院歌壇における弁内侍の和歌

芹 田 渚

一 はじめに

弁内侍は、妹の少将内侍とともに後深草天皇の内裏に仕え、後嵯峨院歌壇でも活躍した女房歌人である。後深草天皇に内侍として仕えた宮中生活を和歌を中心に記した、『弁内侍日記』の作者としても知られている。

後嵯峨院歌壇全体の活動については佐藤恒雄氏⁽¹⁾をはじめ、すでに多くの研究者によって明らかにされつつある。『宝治歌合』については位藤邦生氏⁽²⁾と藤川功和氏⁽³⁾に、共同の注釈を含め論文がある。『宝治百首』⁽⁴⁾については安井久善氏⁽⁴⁾や、鈴木徳男氏の研究⁽⁵⁾があるほか、藤平泉氏⁽⁶⁾は同じ題の歌の中に共通する表現が頻出することを指摘し、建保期の和歌からの摂取が多いことを論じている。蒲原義明氏は藤平氏の論を引いて、為家の歌題設定が多様な表現を阻んだのではないかと述べている。また、『影供歌合』⁽⁸⁾には安田徳子氏の論文があるなど、多方面からの研究が進んでいる。弁内侍の和歌について阿部真弓氏⁽⁹⁾は、『弁

内侍日記』における寛元四年以前の弁内侍の和歌は独詠歌が多く、宝治元年以降の和歌にはコミュニケーションとしての和歌や宮廷集団の代詠歌が多い。それは『宝治歌合』『宝治百首』⁽¹⁰⁾において弁内侍の歌才が認められたからである、としている。村田紀子氏は弁内侍の歌壇活動が『弁内侍日記』に書かれている時期とほぼ重なっていることを指摘し、合わせて勅撰集入集歌のうち、『弁内侍日記』所収歌との比較を行っている。しかし、弁内侍の歌壇活動についてはいまだ考察の余地が残されているといえよう。

弁内侍は、生涯に『河合社歌合（寛元元（一二四三）年十一月一七日）』『宝治歌合（宝治元（一二四七）年）』『宝治百首（宝治二（一二四八）年）』『影供歌合（建長三（一二五二）年九月一三夜）』に参加し、『続後撰集』に四首、それ以降の勅撰集に四一首の入集を果たした。⁽¹¹⁾ 本稿では、両者を比較することで、弁内侍が後深草天皇内裏と後嵯峨院歌壇とでどのような意識の違いを持って和歌を詠んでいたか考えたい。⁽¹²⁾

次に、弁内侍が参加した歌壇活動の年表をあげる。⁽¹³⁾

開催年	歌会	出典	主催者
寛元元（一二四三）年	河合社歌合	証本あり	藤原信実
寛元三（一二四五）年	道家家秋三十首和歌会	新後撰集	九条道家
宝治元（一二四七）年	宝治歌合	証本あり	後嵯峨院
宝治二（一二四八）年	宝治百首	証本あり	後嵯峨院
建長二（一二五〇）年	後嵯峨院仙洞詩歌合	続拾遺集	後嵯峨院
建長三（一二五一）年	影供歌合	証本あり	後嵯峨院
	吹田御幸十首歌和歌会	続古今集	後嵯峨院
建長六（一二五四）年	龜山殿仙洞五首和歌御会	続古今集	後嵯峨院
正嘉元（一二五七）年	蓮生法師八十賀	新和歌集	蓮生法師
正嘉三（一二五九）年	北山行幸和歌	証本あり	後嵯峨院

二 宝治歌合—宝治元（一二四七）年

確認される限り初の歌合への参加である『河合社歌合』⁽¹⁴⁾の成績は、藤原行家に対して負一・持二であった。弁内侍の父信実の主催であり、歌才を謳われての出詠というよりも、今後の活躍を期待しての初舞台であったと考えられる。後深草天皇の即位前でもあり、春宮弁の名で出詠している。弁内侍にとって初学期にあたる『河合社歌合』から勅撰集への入集歌はない。「千鳥」題では「河風に千鳥鳴くなりうば玉のよるの水の上やかなしき」（十八番・左・弁・三五）と詠み、為家に「よるの水のうへやとさされたるぞ、いかかと見え侍る」と判

じられて負けとなった。「夜」の「氷」の「上」や、「氷」の「上」の「千鳥」を詠む先例がないことを言っていると思われる。

二度目の参加となる『宝治歌合（院御歌合）』では藤原有教に対して勝六・負一・持三の成績を修めている。『宝治歌合』における弁内侍の歌は、八代集にあるような著名な和歌と、後鳥羽院・順徳院時代に流行した和歌の詞を取り入れて詠まれるという特徴がある。心のみ行きかへりつつ山たかみをられぬ花ぞうつるひぬべき

（廿一番・山花・右勝・弁内侍・42）

「山花」題で詠まれた歌は位藤・藤川両氏の注釈⁽¹⁵⁾によると、『古今集』三五八番歌を本歌としている。ここでは新たに『古今集』四三番歌も挙げたい。

内侍のかみの右大将藤原朝臣の四十賀しける時に、四季の絵描ける後ろの屏風にかきたりけるうた

山たかみくもゐに見ゆる桜花心の行きてをられぬ日ぞなき

（『古今集』賀歌・358）

心だけが花を見に行くという発想は、為家判が「こころのゆきてといへる、をかしとりなされて侍れば、をられぬ花にこころうつるひ侍りぬ。以右為勝」と指摘したとおり、『古今集』三五八番歌の「心のゆきて」からとられている。『古今集』では、四季の屏風絵にある桜だから、実際に山には行くことなく心だけが花のもとに行くと詠まれているが、弁内侍の歌は「山花」題であり、実際の山が想定されている。心だけが桜のもとへ行く理由は「山たかみ」とされ、山には行か

ず花を手折ることもないままにうつろっていくのだろうかと喪失感を残し、『古今集』の詞を借りつつも新たな視点で歌を構成している。

また、「折られぬ花」という表現にも特徴がある。

水のほとりに梅花さけりけるをよめる

春ごとにながるる河を花と見てをられぬ水に袖やぬれなむ

〔『古今集』春歌上・伊勢・43〕

花の色のをられぬ水にさすさをのしづくもにはふ宇治の河長

〔『拾遺愚草』下・建保二年内裏詩歌合、河上花・2173〕

桜や菊が「折られぬ」と詠む例は、平安期には『古今集』、『村上天皇御集』、『紫式部集』の三首しかない。しかし院政期になると、鳥羽院に仕えた菅原在良や、覚性法親王、西行らが詠み、家隆や慈円、後鳥羽院にも用いられた。定家には四例あり、『新勅撰集』にも『村上天皇御集』の一首を撰んでいる。院政期に再発見され、好まれた詞であると言えよう。

他の歌題でも、為家の判詞には「ふるき詞多く聞えて（五月郭公）」『古き歌の詞同じ句にならひて（旅宿嵐）」などと、古歌の詞をそのまま取り入れている様子が指摘されている。また、全てではないが、弁内侍が参考とした古歌の作者は女性や女房歌人が多い傾向がある。「心の行きて」と詠んだのは尚侍、¹⁶⁾「をられぬ」と詠んだのは伊勢である。

『宝治歌合』からも「逢不遭恋」題が『新統古今集』に一首撰ばれたのみである。しかし、古歌を元にしつつ後鳥羽院・順徳院歌壇で好

まれた表現を取り込んで構成するという弁内侍の手法はこの頃から見ることができると言える。

三 宝治百首—宝治二（一二四八）年

『宝治百首』は来るべき勅撰集の編集資料として後嵯峨院が召された百首歌である。もともと弁内侍は作者二五名のうちに入っていないが、のちに兄の為継や妹の少将内侍とともに一五人の追加人数の中に入った。藤平氏が指摘したとおり、『宝治百首』の歌は歌人間に共通した語が多く、弁内侍の歌にも同じ傾向が見られる。袖ぬらす野沢の水に影みればひとりはずまぬ若菜なりけり

（沢若菜・196）

『新後撰集』にも撰ばれた一九八番歌は、『冬題歌合』における通光の和歌と三、四句目の言葉が酷似している。

神無月こほれる月の影みればひとりはずまぬふはの関守

（冬題歌合・十八番・冬関月・左勝・通光・35）
通光が月と関守を比べ「ひとりはずまぬ」としたのに対し、弁内侍は水に映った姿を指して「ひとりはずまぬ」と詠む。言葉の上では同じであるが、月の光を水面に映る自らの姿に変え、冬の不破の関から春の野沢に場面を交換するなど通光の歌との違いがある。月かげにまだ夜ぶかしと思へども淀の渡は舟いそぐなり

（渡月・1717）

同じような手法は秋歌の「渡月」題にも見られる。ここでは光俊の歌

を二、二句目にそのままひいている。

月かげにまだ夜深しとやすらへばはや人やりの鳥はなくなり

（『新撰和歌六帖』第五帖・暁におく・光俊・1415）

天曆御時御屏風に、淀の渡りする人かける所に

いづ方になきてゆくらむ郭公よどのわたりのまだよぶかきに

（『拾遺集』夏・壬生忠見・113）

たなかみにてよみ侍りける

旅寝するあしのまろやの寒ければつまぎこりつむ舟いそぐなり

（『新古今集』羈旅歌・大納言経信・92）

光俊は、月影があるのに鶏が鳴いたとして暁題を詠んでいる。弁内侍は一、二句目を借りつつも「淀の渡り」に場面を移す。その「淀の渡り」は、光俊が詠んだ「夜深し」から、『拾遺集』の忠見詠の「夜深し」と「淀の渡り」の組み合わせに発展させており、五句目は『新古今集』経信詠から「舟いそぐなり」をひいている。どの言葉もつながりを持ち、その先行歌は勅撰集と寛元元年に詠まれた『新撰和歌六帖』という当時よく知られていたであろう歌である。

『新撰和歌六帖』は暁の鶏を聞くのにまだ夜が深いと詠み、『新古今集』は寒いので舟を急がせると詠む。『拾遺集』は夜が深いのにほととぎすはどこへ行くのかと問いかけの形で終わる。いずれも上の句と下の句のあいだに理由が詠まれているのに対し、弁内侍の歌は「渡月」という題から、月が出ているのに舟が急ぐさまを導き出している。一首の歌から二句ちかくの詞をひいて、同じ箇所置きながら、季節や

情景を全く別のものとして詠んだ例である。

つもりても哀いくへに成りぬらんかつちる花の程ぞふり行く

（落花・676）

跡なしと見てもいくへに成りぬらんつもれるままの庭の白雪

（『洞院撰政家百首上』冬・雪五首・信実朝臣・951）

建暦二年内裏詩歌合、羈中眺望といへる心をよみ侍りける

越えわぶる山もいくへになりぬらむわけゆくあとをうづむ白雲

（『新勅撰集』羈旅歌・藤原頼実・533）

「落花」題は弁内侍の父である信実の詠歌と二、三句目がよく似ている。山や雲が「いくへになりぬらむ」という表現は『新勅撰集』や『範宗集』にも見られるものの、何かが降り積もって「いくへになりぬらむ」という発想は信実から学び、雪が幾重にも降り積もるさまを、弁内侍は花が散り積るさまに転じたと考えられる。庭の白雪は「積もれるまま」に「いくへ」に降り積もっていくが、薄く淡い花では積ったからといって「いくへ」には積もらない。以上三首は隣接する二句近くの詞を他の歌から借りているが、元の歌とは場面や季節を一転させている例である。

弁内侍が、宮仕えを描いた『弁内侍日記』には、信実の歌から強く影響を受けた和歌（二段／寛元四年）や、信実が内裏に梅を献上して添えた歌に弁内侍も返歌をする様子が記されている（七九段／建長元年）。また、多くの章段で弁内侍と妹の少将内侍が贈答歌やよく似た歌をともに詠む様子が書かれているなど、信実、弁内侍、少将内侍の三

者の和歌の間に強い影響関係が見られる。

しかし題詠歌を見る限り、弁内侍と信実、少将内侍が似た歌を詠んでいるようには見られない。たとえばこの「落花」題で父信実は「おのづからちりかかるとも山桜苔の衣のうはぎにはせじ666」、妹少将内侍は「山里の花は雪とぞふりにけるけふこむ人やつらしと思はん677」、兄為継は「いたづらに雪とふりぬる山桜けふ尋ねてもみるかひぞなき666」と詠んでいる。少将内侍と為継がともに「雪」を詠んでいるが、「落花」題で四〇人のうち一四人が「雪」を詠み込んでおり、目立つ一致ではない。また他の歌題でも、多くの歌人が同じ詞を詠んでいる。「落花」題には『洞院撰政家百首』の信実詠からの影響が見られるものの、前に挙げたように通光や光俊からの影響を受けた歌もあり、信実の影響だけが見られるとはいいいがたいのである。

『宝治歌合』では、古歌と後鳥羽院・順徳院歌壇で用いられた詞を多く取り入れていたが、『宝治百首』ではそれに加えて『宝治歌合』で他の歌人が用いた詞を学んでいる。佐藤恒雄氏は後嵯峨院について、「天皇在位中に和歌御会を催した形跡はほとんどない。寛元三年末までの内裏関係の文雅は、御書所作文会と連句会が主であって、(略)宝治元年度はなお漢中心の活動が続いている。(略)宝治二年になると、作文御会や連句御会にかわって、和歌が主となった観さえあり」と、後嵯峨院歌壇の動きをまとめている。また、小林強氏も、後嵯峨院の讓位以前の和歌は五首、讓位後から『宝治歌合』までの和歌

は四首しかないことを指摘している。『宝治歌合』を詠んだ宝治元年の時点では、後嵯峨院歌壇の流行がまだ明確になっていなかったのだろう。『宝治歌合』一〇題二六人の詠歌を経て、後嵯峨院歌壇に好まれる詠み方を弁内侍は『宝治百首』で模索したのではないだろうか。次に挙げる歌は『宝治歌合』から影響を受け、『宝治百首』内で複数の歌人が同じ詞を用いている例である。

空はれて出づる朝日の影を見よ君が光のためしなりけり

(寄日祝・3994)

「影を見よ」という詞は『坊城右大臣殿歌合(天曆十(九五六)年)』で月の光に用いられている例と『蜻蛉日記』の星合、『寂蓮法師集』の哀傷歌、『新勅撰集』の釈教歌しかなく、日の光や祝歌に使うのはこの歌が初例になる。また、「ためしなりけり」という詞は『壬二集』に見られ、古歌や新古今時代の影響と、両方を取り入れている。

よろづよの影をみよとや大空のてりまさるらむ秋の夜の月

(坊城右大臣殿歌合・一番・月・右・大輔君・C)

ふる雨も照す日影も君が代の空につきせぬためしなりけり

(『壬二集』後度百首・雑・200)

「あさひ」が「いずる」と詠む例は『拾遺愚草』に三首、『壬二集』に五首、『後鳥羽院御集』に二首あるが、『宝治百首』にも御製を含み計八首あり、うち七首が「寄日祝」題で詠まれている。祝歌は個性が乏しいものではあるが、藤平泉氏が『宝治百首』には「多くの歌題の歌で共通する表現が見られる」と指摘されたとおり表現と発想の類似が

見られ、これは定家や家隆の影響である以上に『宝治百首』内部での詞の一致であると考えられる。

さして出づるみかさの山の朝日かげ曇なき世ぞ久しかるべき

（『宝治歌合』・百廿三番・社頭祝・右・為教・244）

久堅のあまの岩戸のあけしよりいづる朝日はくもる時なし

（『宝治百首』寄日祝・御製・3957）

いづる日の君の光のます鏡むかふ千とせは空にみゆらし

（基家・3960）

君がため雲さへ空にをさまれる御世と朝日の出づる山の端

（忠定・3969）

みかさ山千とせを松の木のみより出づる朝日の末ぞくもらぬ

（高倉・3988）

しるきかないづる朝日のいく千代もくもらぬ御代の行末の空

（但馬・3995）

また、「きみが光」と詠む例は『散木奇歌集』を初例とし、『隆信集』や『秋篠月清集』では祝歌に用いられている。しかし、これも『宝治百首』の同じ題に二例あり、やはり『宝治百首』内で同じような詠み方がなされていたのだろう。

若葉さす君が光にあふひくさよろつ代かけて神やうへけむ

（『隆信朝臣集』夏・千五百番歌合に・97）

このころは秋のしま人時をえて君が光の月をみるらむ

（『秋篠月清集』下・祝部・秋帖・月・1384）

日の本の国のうちなる宮こより君が光も代をてらしけり

（『宝治百首』寄日祝・隆祐・3986）

朝日影君が光にさしそへてくもりなき代をいまぞしりぬる

（禪信・3987）

藤平泉氏と蒲原義明氏が、後嵯峨院歌壇の表現の狭さ、歌題の設定について論じておられるが、この点についてはのちの『影供歌合』における『宝治百首』の詞の利用をも視野に入れて後述したい。

『弁内侍日記』にある最初の和歌は、後深草天皇の御代が始まることを寿いだ「今日よりは我が君のよと名づけつつ月日し空にあふがざらめや」である。⁽²⁰⁾詳しくは別稿で述べるが、この歌は『古今集』仮名序をもとに作られている。弁内侍の題詠歌の中で最も似た歌題がこの『宝治百首』の「寄日祝」であろう。しかし、「寄日祝」の歌は『古今集』の影響はうけていない。また、『宝治百首』の最初の題である「歳内立春」題でも弁内侍は「冬もいまいくかもあらずくれぬるをその程またず春立ちにけり」³⁸と詠んでおり、これも『古今集』の影響は受けていない。『弁内侍日記』とは違い、弁内侍の題詠歌は後嵯峨院歌壇の中で流行した詞を取り入れて作られているのである。

（待郭公・876）

なきぬとも人にかたらじ郭公ただしのびねは我にきかせよ

（『続古今集』夏歌・題しらず・小弁・194）

なにしかも人にかたらむ時鳥ただしのびねは我にきかせよ

〔久安百首〕・夏十首・右馬権頭実清・23

弁内侍の『宝治百首』における特徴的な言葉は、そのほとんどが勅撰集にあるような著名な歌か、後鳥羽院歌壇から嵯峨院歌壇で流行した表現の影響を見ることができ、中にはそのいずれにも属さない詞の用い方もある。ほととぎすの忍び音を人に話さないと詠む例は、一条朝の小弁と『久安百首』の実清の詠歌にしか見られない。また、この小弁の歌は『秋風集』を初出とし、『続古今集』、『新時代不同歌合』などに撰ばれている。⁽²¹⁾それ以前の歌集に載っていたかどうかはわからないが、勅撰集には載っていないことから、あまり有名な歌ではなかった可能性がある。『宝治歌合』では勅撰集にあるようなよく知られた和歌を参考にしていたが、『宝治百首』ではあまり知られていない歌もひいていと言えよう。『秋風集』と『続古今集』の撰者はみな『宝治百首』に参加している。弁内侍の歌によって小弁の歌が新たに評価されたとも言えるのではないだろうか。

身より猶余る思ひを誘ふ水ありとやここに蛩とぶらん

(水辺蛩・1118)

同様に、「水辺蛩」題で詠まれた歌も、今までの伝統とは違う視点から詠まれている。「誘ふ水」はあまり使われない言葉だが、小野小町を初出とする。良経や隆信にも用いられ、信実も用いているが、「身」とともに詠んでいることから小野小町を直接の参考としているのだろう。

文屋康秀三河のぞうになりて、県見にはえ出でた

後嵯峨院歌壇における弁内侍の和歌(芹田)

じやと言ひやれりける返事によめる

わびぬれば身をうき草のねをたえて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ

〔古今集〕雑歌下・小野小町・338

さそふ水ありて行せのなくはこそ世をうき草のさてもたえなめ

〔新撰和歌六帖〕うき草・信実・2054

身よりあまる心のほどはしらねども袖の蛩はあはれなりけり

〔俊成祇園百首〕夏十五首・蛩・30

小野小町や信実に見られるように、「誘ふ水」は「憂き」ところから自分を外に誘い出してくれるものとして詠まれてきたが、弁内侍はそれとは逆に、「あまる思ひ」を誘い出し、自覚させる存在としての「誘ふ水」を描写している。また、「思ひ」に蛩の「火」をかけたたり、『俊成祇園百首』のように蛩火を自分の思いが外に表れる象徴とする例は多くある。しかし、水をあふれる思ひの象徴として、その水のありかを示すかのように蛩が集まってくるという詠み方は他に類を見ない。この歌の他文献はないが、のちに頼阿が下の句のほとんどを似せて詠んだ歌は弁内侍の影響を強く受けた一首であろう。

草ふかみみえぬ野沢の埋水ありとやここにとぶほたるかな

〔草庵和歌集〕聖護院入道親王家にて、同じ心を(野蛩)・383

四 影供歌合―建長三(一二五二)年九月一三日

『影供歌合』で詠まれた弁内侍の和歌には、『宝治百首』で歌人たちが詠んだ和歌の影響が見られる。『影供歌合』は建長三年の九月一三

夜に行われた。寛元四（一二四六）年の後深草天皇即位から五年を数え、同年一二月二五日には『統後撰集』の奏覧があった。『統後撰集』完成を祈念して行われた行事であり、弁内侍の成績は定雅に対して勝五・負一・持四となっている。

おく露は草ばのうへとおもひしに袖さへぬれて秋はきにけり

（四番・初秋露・右・弁内侍・8）

中関白女の許より暁にかへりてうちにもいらで戸にゐながら
帰りはべりにければよめる

暁の露はまぐらにおきけるを草葉の上となにおもひけん

（『後拾遺集』恋二・高内侍・701）

露をみて草葉のうへとおもひしは時まつ程の命なりけり

（『和泉式部集』上・親身岸額離根草、論命江頭不繫舟・304）

この時「初秋露」題で詠まれた弁内侍の歌は、のちに『統後撰集』秋歌上の巻頭歌である後嵯峨院詠の次に置かれ、高い評価を得ている。歌合では左歌が祝歌だったために負けとなったものの、「右歌ことによりしきよし」と人々に評価され、『新時代不同歌合』にも撰ばれている。弁内侍の代表歌のひとつと言えよう。草葉と袖の露を詠む歌は古来多くある。そのうち弁内侍が詠んだような、露が置くのは草葉の上だけではなかったという歌は『後拾遺集』や『和泉式部集』にあり、特に『和泉式部集』は「草葉の上と思ひし」までが一致している。しかし、高内侍が恋歌を、和泉式部が無常・釈教を詠んだのに対し、弁内侍は秋の来る愁いを詠んでいる。この「秋はきにけり」という詞も

使用例は多いが、草葉と袖の露を見比べつつ「秋はきにけり」と詠む歌は『正治初度百首』の定家詠と、『宝治百首』の為家詠以外にない。「おく露」に「袖さへぬれて」という表現も、同じ『宝治百首』の家良詠から得たのではないだろうか。

しら露に袖も草葉もしをれつつ月影ならす秋はきにけり

（『正治初度百首』秋・定家・1340）

白露も草葉をおきて袖ぬらす我が身一と秋はきにけり

（『宝治百首』秋廿首・早秋・為家・1208）

おく露に袖さへぬれて遠方のあかしのこやにあかしかねつつ

（『宝治百首』雑二十首・旅宿・家良・3802）

あさねがみこぼれていとどみだるともこはぎが露は折りてかざさん

（四十六番・朝草花・右持・弁内侍・92）

おき侘びぬながき夜あかぬくろかみの袖にこぼるる露乱れつつ

（『洞院摂政家百首』恋五首・権中納言定家・1213）

「朝草花」題も、定家詠を基盤に置きつつ、『宝治百首』の影響を受けた歌である。為家判では「朝寝髪こぼれてとつづけたる、いかがと申す人侍りしかども、ことにこぼれかかると申しならへれば、おもかげすてがたしと各申して為持」とされているが、髪がこぼれるという表現は『洞院摂政家百首』での定家詠以外に存在しない。定家は髪が袖にこぼれ落ちること、涙の露が袖にこぼれ落ちることをかけて詠み、弁内侍は涙ではなく萩の露と髪の流れとともにこぼれるという詞で表している。

「折りてかざさん」という表現は『万葉集』以来、『古今集』、『後撰集』、『古今和歌六帖』などに見られるが、それ以降は俊恵や家隆、慈円が一首ずつ詠んでいる程度にしか用いられなかった。ところが『為家千首』に二首用いられたためか、『宝治百首』では四人の歌人によって用いられている。いずれも桜の歌であり秋歌ではないが、後嵯峨院や為家といった主要な歌人たちによって詠まれている。

いざ桜我もかはらず年をへて老いせぬ春は折りてかざさん

(『宝治百首』春甘首・翫花・御製・561)

よしやけふ人などがめそ花盛り我が老いらくに折りてかざさむ

(為家・568)

いざ桜折りてかざさむ花にあかぬあだし心の色やまがふと

(実雄・570)

身にちかく折りてかざさむ花桜春ののこりもあかぬ名残を

(下野・600)

秋の田の庵もるよはのあくるまはいかに露けき月とかはしる

(百三十番・田家月・右勝・弁内侍・560)

嘆きつつ一人ぬる夜にあくるまはいかに久しきものとかはしる

(『蜻蛉日記』上・27)

秋の野のいさわくる庵の鹿の音にいく夜露けき月をみつらん

(『仙洞句題五十首』月前閑鹿・定家・215)

「田家月」題で詠まれた歌は『蜻蛉日記』にある道綱母詠と、『仙洞句題五十首』の定家詠をもとにしている。「夜にあくるまはいかに」

「とかはしる」という道綱母の歌の構成を利用しつつ、「庵」の中で「袖ぬらす」、「露けき月」というつながりで定家詠を想起させる。「露けき月」という表現は定家以外に詠まれていない。また「いほもる」という詞は西行が初例と見られ、西行以降、『宝治百首』までに一四例あり、『宝治百首』には七例、『影供歌合』には弁内侍を含めて六例詠まれている。「庵守る」に、雨や月光が「洩る」が掛けられる例と掛けられない例があるが、弁内侍の「いほもる」は「露けき」とともによまれており、涙をさすとともに、庵に露がもれる山家のわびしさを表すものと考えられる。後嵯峨院歌壇の影響を強く受けた歌のひとつである。

こはぎさく山だのくろのむしのねにいほもる人や袖ぬらすらん

(『山家集』上・秋・田庵聞虫・462)

摂政太政大臣家の百首歌合に

わきてなどいほもる袖のしをるらむいなばにかぎる秋の風かは

(『新古今集』秋歌下・前大僧正慈円・453)

尋ねとも思はで入りし奥山のいほもる花を独こそみれ

(『宝治百首』春甘首・見花・俊成女・556)

を山田のいほもるしづの秋の袖やどかる露ぞおきあかしける

(秋甘首・秋田・俊成女・1475)

君が代にあふたのみこそうれしけれ庵もる雨のときもたがはず

(雑二十首・田家雨・俊成女・3753)

秋の田のかりそめならず袖ぬれていほもる雨はふりぞまされる

秋の田の庵もる人のいねがても月ゆゑとてや袖ぬらすらん
（少将内侍・3754）

夜をかさねいねてふことも忘れぬ庵もる月をみるとせしまに
（『影供歌合』百三十二番・右・少将内侍・364）

夜もすがら庵もる露のおきゐつつとは田の面に月をみるかな
（百四十番・左・按察・279）

（右・右近大将公相・280）

藤平泉氏は『宝治百首』には「多くの歌題の歌で共通する表現が見られる」⁽²²⁾、「表現の幅がきわめて狭い」と述べ、『和歌文学大辞典』⁽²³⁾では「類型的で共通する表現が多数見えるなど、新古今時代からの有力歌人たちと新進歌人たちの力量の差が如実に表れている」としている。蒲原義明氏は、『源承和歌口伝』の伝える、『宝治百首』には「秀歌よめる人はすくなくて」という言葉や、安井氏の『宝治百首』は非専門歌人の歌を収集するためのものである、という説を引きつつ、『宝治百首』の歌題は「堀河百首に見える、いわゆる伝統的な歌題に、場や時間、状態を示す語を添えただけの比較的簡単なもの」で、「非専門歌人達にとっても比較的詠みやすいようにと意識された歌題設定」であったために、詠まれた歌は『万葉集』を用いた反御子左家勢力を除けば「あまり趣向をこらすことなく伝統によりかかった極めて狭い発想」となってしまった、それは為家の歌題設定にも一因があるのではないかと推察している。首肯されうる指摘であり、確かに歌歴の浅

い歌人が多数同じ詞や名所を詠んでいることは否定できないが、弁内侍は八代集にある歌から同時代の歌にいたるまで時代を問わずさまざまな表現を学んでいる。それだけではなく、「待郭公」題の八七八番歌は当時ほとんど知られていなかったであろう小弁の歌からの撰取である。また、『弁内侍日記』にも当時あまり知られていなかったであろう私家集から学んだ弁内侍の歌が残されている。以上のことから考えると、弁内侍は経験の浅い歌人であったために表現の幅が狭くなってしまったのではなく、多くの和歌を学んだ知識の中から、後嵯峨院歌壇の流行に合わせて表現を絞り込んだのではないだろうか。

五 おわりに

弁内侍の題詠歌の詠み方には、八代集にあるような著名な古歌と、近い時代に詠まれた新しい流行表現とを融合させようという試みが見られる。『宝治歌合』では古歌と後鳥羽院歌壇・順徳院歌壇で流行した表現を、『宝治百首』ではそれに加えて『宝治歌合』で用いられた表現を詠みこんでいる。『宝治百首』では後嵯峨院歌壇の他の歌人と同じ表現を用いる例があり、『宝治歌合』が行われたときには明確に表れていなかった後嵯峨院歌壇の好む詠み方を『宝治百首』で取り入れたのだと考えられる。同じ傾向は『影供歌合』にも見られ、『宝治百首』で多くの歌人に用いられた表現を取り込む詠み方が表れている。

取り入れる詞は、古歌においては女房歌人の歌が多く、近代歌人は

俊成・定家といった中世歌壇を指導した歌人から、父である信実、後嵯峨院歌壇を指導した為家、また当時すでに反御子左家として活動していた光俊から学んだ例も見られる。為家からも反御子左家からも学ぶ姿勢は、両者と隔てなく中立的立場を保った父信実の姿勢にも通じる一面が見える。

その結果としてか、『続後撰集』には『宝治百首』から一首、『影供歌合』から二首、『弁内侍日記』から一首の入集を見た。これは、後嵯峨院歌壇から活動を始めた女性歌人としては、妹の少将内侍の五首に次ぐ数である。『続後撰集』に最も多く歌を撰ばれた女性歌人は和泉式部の一五首。次に式子内親王の一四首、俊成卿女の一一首と後鳥羽院歌壇からの有力歌人が続く。中務や待賢門院堀河、伊勢といった前代の歌人を除き、後嵯峨院歌壇に参加した女性歌人のみを見ると、六首を数える八条院高倉、後鳥羽院下野、土御門院小宰相が俊成卿女の人数歌数に次ぐ。しかしこの三人も『新古今集』や『新勅撰集』を初出とするベテラン歌人であり、後嵯峨院歌壇から活躍し始めた歌人ではない。五首が藻壁門院少将、少将内侍、四首が弁内侍であるが、藻壁門院少将も『新勅撰集』を初出としており、『続後撰集』を初出とする女性歌人の中では、少将内侍の五首が最も多く、弁内侍の四首が次に多い。そのあと弁内侍の題詠歌は『風雅集』と『新千載集』を除く全ての勅撰集に撰ばれており、弁内侍は後嵯峨院歌壇を代表する女房歌人のひとりとしての地位を獲得したのであるといえよう。

注1 佐藤恒雄氏『藤原為家研究』（笠間書院 二〇〇八年九月）

(2) 位藤邦生氏『宝治元年「院御歌合」表現論』（『表現技術研究』六二〇一〇年三月）

(3) 藤川功和氏『宝治元年「院御歌合」内部考証―構成、勅撰集入集状況、出詠歌、判詞を手がかりに』（『表現技術研究』六二〇一〇年三月）

(4) 安井久善氏『宝治二年院百首とその研究』（笠間書院 一九七一年一月）

(5) 鈴木徳男氏『宝治百首』について（『中世文学論稿』六 一九八〇年三月）

(6) 藤平泉氏『宝治百首』流行の表現（『神女大國文』六 一九九五年三月）

(7) 蒲原義明氏『宝治百首題について』（有吉保氏編『和歌文学の伝統』角川書店 一九九七年八月）

(8) 安田徳子氏『建長三年九月十三夜影供歌合について』（『名古屋大学文学部研究論集（文学）』三一 一九八五年三月）

(9) 阿部真弓氏「歌人弁内侍にとつての『弁内侍日記』試論」（『詞林』一七 一九九五年四月）

(10) 村田紀子氏『弁内侍日記』の和歌についての一考察―勅撰集入集歌との関わりから（『今関敏子氏編『中世日記・随筆』日本文学研究論文集成一三 若草書房 一九九九年二月）

(11) ただし、『続拾遺集』八七二番歌と『続千載集』一二七四番歌は同じ歌である。『続拾遺集』八九八番歌は「閑窓撰歌合」では少将内侍の歌。また『続古今集』一一〇五番歌の少将内侍の歌は『宝治百首』では弁内侍の歌。『玉葉集』一〇二三番歌の少将内侍の歌も『弁内侍日記』では弁内侍の歌。

(12) なお、『弁内侍日記』の和歌については『中世文学』第六〇号に掲載予定の拙稿をご参照いただきたい。

(13) 出典不明の題詠歌は、『続拾遺集』九〇（人家集にも）・一二五・三七九（人家集）番歌、『新後撰集』一二五二（源承和歌口伝・現存和歌六帖・人家集）番歌、『玉葉集』一四二〇番歌、『続千載集』一四二四

後嵯峨院歌壇における弁内侍の和歌（芹田）

- 番歌、『続後拾遺集』四二五（万代集）番歌、『新拾遺集』一三三七番歌、『万代集』二二三三番歌、『秋風抄』二〇八番歌、『現存和歌六帖』四四八番歌、『人家集』四二一・四一三・四一六番歌。年次不明の歌は、『新拾遺集』一五八七番歌「老の後あふきといふ山里にこもりゐて侍りけるに、亀山院より題を給はりて歌よみてたてまつりけるに、七夕衣」。また、『続古今集』六五四（秋風抄・秋風集）番歌は詞書に『宝治百首』とあるが、『宝治百首』には存在しない。少将内侍が出詠した「建長二年八月十五夜鳥羽殿三首歌合」（『続拾遺集』、「建長六年仙洞三首歌合」）（『続拾遺集・新後撰集』に弁内侍も出詠していた可能性もある）。

- （14）和歌は『新編国歌大観』（角川書店）から引用し、私に表記を改めたところがある。

- （15）位藤邦生氏 藤川功和氏「宝治元年『院御歌合』注釈―「山花」題」（『広島大学大学院文学研究科論集』六六 二〇〇六年二月）

- （16）醍醐天皇に仕えた藤原満子か。

- （17）（1）に同じ。

- （18）小林強氏「後嵯峨院の詠作活動に関する基礎的考察」（『中世文芸論稿』一六 一九九三年三月）

- （19）うち一首は「朝日山」を詠む。

- （20）岩佐美代子氏校注・訳「弁内侍日記」（『新編日本古典文学全集 四八』『中世日記紀行集』小学館 一九九四年七月）

- （21）当該歌と『続古今集』の小弁の歌は「鳴く」「語らじ」という言葉が一致するが、『秋風集』では「ききつとも人には告げじほととぎすただ忍び音はわれにきかせよ」¹⁸）となっている。本来どちらの形であったかはわからない。

- （22）（6）に同じ。

- （23）『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー）

- （24）『風雅集』には弁内侍の歌が撰ばれていない。『新千載集』には『弁内侍日記』から二首撰ばれているが、題詠歌は撰ばれていない。